

---

---

## ホットニュース(平成13年度／第47号)

---

---

### ●今月の業界ホットニュース／人ありき

(財)国土計画協会発行「人と国土」1月号の奮戦コンサル欄に、弊社の紹介記事を掲載して頂いた。宣伝を兼ねて、紹介させていただきます。

「弊社は設立以来30年にわたって、国の内外を問わず、都市計画・交通計画を主たる分野とするプロジェクトに取り組んできた。海外部門では、国際協力事業団のODAの一環を担う開発調査として、発展途上国の首都圏・大都市圏を対象とする都市交通計画・地域開発計画や全国総合交通計画などが多い。最近では、中国成都市の公共交通システム整備計画、ニカラグアの首都交通整備計画、ヴェトナム国運輸交通開発戦略などを終えたところである。とくにフィリピンのマニラ首都圏では、ここ20年間に総合交通計画の大規模な調査を2度行うとともに、関連する計画に継続的に携わっている。国によって異なりかつ様々な事情を持つ対象国政府の要望と日本政府の意向との調整を図りながら、短期の課題解決策から対象都市の都市構造を決定づける長期計画の立案に漕ぎつく達成感の醍醐味は、奮戦の甲斐である。都市計画の分野では、マレーシア国土地区画整理事業適用調査が、わが国の都市計画の代表選手とも言える土地区画整理事業を、途上国に技術移転しようとするもので、大規模・産業インフラへの援助が期待されることの多い開発調査としては、ユニークで意欲的なものであった。ある意味では技術と制度のソフトシステムの移転が対象であり、途上国それぞれの固有の制度とその未成熟のために、まだ十分な成果を得ていない。しかし技術移転の定着に向けて、専門家派遣等による援助体制が継続的に続けられている。

この他にも世界銀行、国際協力銀行等の国際機関の調査や、国際会議、国際セミナー等への協力を依頼されることも多い。

一方国内では、国土計画協会の業務を例にあげると、上越市総合計画や常磐新線整備に伴う沿線各地の開発整備計画などのオーソドックスな調査から、リニアモーターカーを前提とする核都市環状連絡高速鉄道調査、リニア中央新幹線に関する調査など国家的プロジェクトの調査にも参画してきた。上越市では、総合計画で提案したいくつかのプロジェクトや関連する事業などが、実施あるいは推進されており、これらにも継続的に関わりつづけている。常磐新線とのお付き合いも長く、関連する県や市町村からの都市計画・交通計画に関わる仕事も続いている。核都市間の一周を山手線並みの時間距離で連絡したら、都市構造はどのように変化し、需要はどうなるのか。

他にも、リサーチパークの魁となった京都リサーチパークのコンセプトマークから立ち上げへのコンサルティング、交通バリアフリー法を先取りした「タウンモビリティとまちづくり」の出版、中心市街地活性化のプロトタイプ的調査としての安心安全まちづくり、および東京都のTDMの検討調査など、たえず先駆的に新たな課題に取り組んでおり、奮戦の種は尽きない。」

(代表取締役 堀田 紘之)

---

---

### ●交通技術者資格認定制度について

---

---

現在我々業界に関連する資格制度としては、技術士を始めRCCM、区画整理士等種類の資格制度がある。また、2001年5月から(社)土木学会において「土木学会認定技術者制度」を発足させており、4段階の資格ランクの中の特別上級技術者資格審査が行われた。しかし、交通工学・運用という分野ではこれら関連業務が多い割には、専門知識・技術の認知がされていないのが現状であり、上記資格においてもこれら分野の視点は少ない。

一方、米国においては、PTOE(Professional Traffic Operations Engineer)「交通運用技術士」が全国レベルの資格制度として1999年1月に発足しており、日本においてもこれら分野の専門技術者の育成に向け、交通工学研究会の「交通技術に関する資格認証制度検討委員会」において制度設立準備が進められている。

現在、委員会では、資格制度の運用イメージは基本的に米国を踏襲した形で検討を行うものの、専門技術者に先立ち専門実務者の制度を発足させる方向で検討されている。また、専門技術者、実務者にとって、最低限知っておくべき概念知識と能力を身につけるため、「道路・交通運用技術必携」としてテキストの編纂作業が進められている。

2001年11月段階の構成は以下の通りである。

1. 交通調査 2. 交通流現象 3. 道路の設計と管理 4. 交通安全
  5. 交通管理 6. 交通計画 7. 法制度
- (交通計画部長 大沼 安秀)

●青年海外協力隊レポートvol.8～汚い所は平気ですか？モロッコ衛生事情

それはまだ、モロッコ行きが決まる前のこと。協力隊の2次選考である面接試験のときに、こう聞かれた。「汚い所は平気ですか？」・・・はい。こう答えるしかあるまい。

その後、どんなに汚い所かと内心不安になりながら訪れたモロッコは、慣れたとはいえ、やはり汚い所には違いがない。街中であろうがバスの中であろうが、ゴミは散乱している。車の窓から平気でゴミを投げ捨てる。バスから降りたら、切符はそのへんに投げ捨てる。座席に食べかすが散らかっても平気である。一方、モロッコ人のお宅を訪ねると、非常にきれいに掃除がされている。「自分の家の前を掃いたゴミは隣の家の前に置く」という話も聞いたことがある。要するに、自分の家だけきれいならそれでいいというような感じである。

こんなモロッコのゴミ処理事情はというと、「集めて投棄する」のが一般的で、大都市の市内には、家庭ゴミを一次収集する共同バケツが設置されている。これをゴミ収集車が回収して、ゴミ捨て場に運んでいく。しかし、私の勤務する市では予算がないため共同バケツが買えない。また、共同バケツを導入したとしてもそれを回収するためのゴミ収集車がない。というわけで、今のところ、各家庭でバケツやビニール袋に入れて出すゴミをゴミ収集用トラックが各戸を回って回収しているのが現状である。

先日、ゴミ処理場を見学する機会があった。天然の岩場にトラックを乗り入れてゴミを捨てるのだが、周りには人や羊が待ち構えている。ゴミがおろされた途端、駆け寄ってまだ使えそうなものを探す。また、羊たちも群がってゴミを漁る。実は、有機物の占める割合が6割を占めるモロッコの家庭ゴミのこと、食べ残しや食物の切れ端などで、結構食べられるものが多いものと思われる。それにしても、ゴミの中を金目のものを探し回る人の中には、子供も多い。街中に住み、日本とほとんど変わらない暮らしができる隊員の傍らで、そんな現実も共存している。

(第三計画室 酒井 夕子)

アルメックホットニュース(平成14年2月15日発行)

////////////////////////////////////